

ひまわりからの メッセージ

18号

2012. 9. 11.

西濃園域
発達障がい支援センター
ひまわり

発行人: 中野たみ子

励

ましを

いっぱいもらって……



昨日、関特別支援学校に出向き、脳性まひのお子さん(幼児)と少しふれあい、その後、お母さん方との話し合いの場に臨みました。私が昭和五十四年に、ひまわり学園に赴任した頃は、通ってくるのは肢体不自由のおさんばかりでしたが今は様変わりしてしまいました。でも、昨日は子どもたちと久しぶりにかかわり、私自身が励ましをいっぱいもらった気がしています。

「感性の鋭い子ども達ですから、その感性を受け止めてあげて下さい。そして子ども達のことを詠み、作品を通して多くの人に子どもたちのことを知らしめて下さい。」

皇后さまが作詩された「ねむの木の子守歌」に由来する「ねむの木賞」をいただき、十二年前に皇居で皇后さま

に拝謁した折にいただいたことばです。私が短歌を詠んでいることをお知りになってのことでした。

思うように話ができない、自由に体が動かせない子どもたちの中に在る感性を皇后さまが見守って下さっていることを知って、言い尽くせぬ感激にふるえたことを思い出しました。

世の中には、障がいをもつ子ども達を他の子よりも劣った者、何もできない者として、内心で見下し、さげすんでいる人達も多いでしょう。子ども達と日々関わっている人々の中にも、子ども達の SOS のサインを知りつつも、それは家庭やその子自身のせいだと決めつけ、子どもの困り感に鈍感な人もいらっしゃるでしょう。発達障がいに関しても誤った情報が広がり排除しようという動きもあります。私達は子ども達との関わりの中で、自分の死生観や価値観を試されているのだと私は思っています。

今月末、両陛下が来岐されるとの報道がありました。遠くから一目お目にかかることが出来たらいいなあと思いつつ、私も子ども達をいつまでも見守っていききたいと思いを新たにしたいのです。

夏休みが終って

さあ!! 二学期です!



夏休みが終わって、子どもたちはどんな様子でしょうか。
「学校に行きたくない!」と言っている子どもたちの姿が
浮かんできますが、皆さんのお子さんは大丈夫でしょうか。
夏休みの間、家庭でどのように過ごしたかによっても、九
月はじめの子どもたちのようすはきっと異なっていること
と思います。

さて、二学期に入ると、お母さん方の関心事は、来年度
に向けての適正就学についてではないでしょうか? 保育園
や幼稚園の先生、教員の方々も、一人ひとりのお子さんに
ついて、その子の将来の自立に向けて、悩まれているので
はないでしょうか。

学習の基礎能力

小学校で進められる学習は、一つの教室に整然と並んだ
机に向かって、四〇分四五分という時間、先生の話に聞い

たり、自分たちで課題を話し合ったり、取り組んでいく
という学習が一般的です。子どもたちにとっても、その学
習形式になじんでいくことのできる力が、小学校入学の
前提になっているように思います。

① 学習態度ができています。

学習しようとすることを見たり、聞いたりし、そ
こに注意を向け、その注意を持続させられる。

② 視覚的認知力、聴覚的認知力が年齢相応に育って いる。

文字の読み書き、図形の理解、数の操作など必要
な認知力が備わっている。

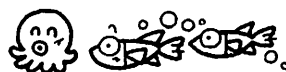
③ 学習したことを記憶する能力がある。

小学校に訪問して、子どもたちの様子を見てみると、一
年生のこの時期に、すでに困っている子どもたちがたくさ
んいます。幼児期から支援を受けていた子もいれば、全く
そういうことがなされずに入学してきた子もいますが、も
しかしたらLQと考えると、予防的取りくみを進めていると

ころも多くなってきたようです。

四〜五歳で次のような特徴が見られる子がいたり、よく観察し、予防的に取り組んでみることで、学習への適応がよくなると考えられます。

- ・ことばの遅れのあった子
- ・できることとできないことに差がある子
- ・先生の指示がわかりにくい子
- ・聞き返しの多い子
- ・理解はしているのに、ことばの数がふえない子
- ・名前を覚えるのが苦手で「あれ、それ、こんなの」等指示代名詞が多い子
- ・発音が単語ばかりで文表現になりにくい子
- ・発音の誤りがなかなか改善していかない子
- ・ことばの言い誤りのある子
- ・しりとりやことば集めなどことば遊びが苦手な子
- ・文字への関心がない子
- ・微細運動が苦手で描画が下手な子
- ・ほんやりしていることが多い子



・何でもすぐ忘れる子

・落ち着きのない子

・まわりが気になって人の話を聞いていない子

・生活面は自立しているのにどことなく気になる子



「発達障がい」と言うと、広汎性発達障害（自閉症スペクトラム）やADHD（注意欠陥多動性障害）の子の行動がクローズアップされる傾向にあるようですが、実は幼児期からこのような気になる面を、「心配いりません」と見すごすことは、良くないのです。もしかしたらLD（学習障がい）であるかもしれませんから、子どもたちに意図的にかかわっていく保育者の力がぜひ必要です。

LDは、脳の機能障がいが原因で、基本的な学習スキルが身につかないことが特徴です。言語、コミュニケーションにおける基本的な学習スキルを考えてみると、

・日本語で使われる音の弁別ができる。

・聞いたことを記憶する力が年齢相応に育っている。

・単語の中の音を分解したり、単語の音韻を自在に操作できる。

・文字習得に必要な形の弁別や記憶がある。

・文字の表記には一定の約束があることがわかる。

・書くための運動能力がある。

・一定時間、課題に注意を向けておくことができる

等といった力です。LDの子は知的なおくれがないので、

「こんな子、他にもいます」「そのうち追いつきます」と

言われてしまうことも多いようですが、就学前に文字に全

く興味をもたなかったり、音の言い誤りが多い場合や、一

年生でひらがな学習の進度が遅い場合は、その時点でLD

を疑ってみましょう。

ただし、必要以上に心配をしたり、あきらめたりするこ

とはやめましょう。先生方と協力して育てていけばいいこと

ですから……

でも、LDってどうしてわかるのでしょうか。

学校では、おそらく様々な検査も行われているので

はないかと思えます。LDIERというスクリーニング検

査や読み書き検査、読書力診断検査、言語能力

をみるためのITPA、フロスティック視知覚発達検

査など、お母さん方にとっては聞いたこともない検査

が多いと思いますが、知能検査とともに、お子さんの特
性や困り感を知っていくものです。

検査では、結果も大切ですが、フロセスも大切です。検査

を進めながら、その子どもの特性や思考のパターンを知

っていくわけです。知らない検査者の前では、十分に実

力を発揮できないこともあるでしょうし、逆にいつもよ

り真剣にまじめに取り組むこともあるでしょう。検査

場面での態度や様子が特性を示すこともあります。

適正就学のために数値だけが一人歩きしてしまうの

ではなく、検査によって得られた情報が一人ひとりの

お子さんの今後に生かされてはじめて、検査の意義が

あるのだと思います。（そう言っている私自身、まだま

だ分析が不十分で、お子さんのために生かしきれていな

いことを反省するばかりですが……）

学習の困難さも、単に子どもの努力不足だと決めつけ

ないで、どこでつまづいているのかを知っていくことが必

要です。担任やコーディネーターの先生方には是非力を貸し

ていただきましょう。



自信を育てる ことばかけ

ところで、お母さんたちは、自分のことばかけについて、考えてみたことがありますか。

大好きなお母さんのことば一つで子どもは自信をもつようにもなるし、自分にまします自信がなくなってしまうたりするのですが……。

例えば、お子さんが国語のテストで七〇点だったとしましょう。お母さんはどのようなことばかけをするでしょうか。

① いつも言ってるでは。勉強しないから……。こんな点数しか取れないのよ。

② ちゃんと勉強したの。前より悪いじゃないの。

③ 今度はがんばろうね。

④ まあまあだね。

⑤ 漢字のところはできてたのにね。どこが難しかったのかなあ……。

①と②はマイナス面の指摘ですね。③は良いように思えますが、実は今回悪かったことを暗に指摘してしま

す。④は子どもも認めてはいるものの、どこが失敗の原因だったのかに気づかせてはいませんね。

この様に、ことばかけというのは大切ですね。いつも①や②ばかりじゃ子どもは、勉強しようという気持ちにはならないでしょう。つまり、やろうという意欲まで無くしてしまうことになります。「メタ認知」ということばがあります。自分を客観視して「〇〇は得意だけど△△は苦手」とか「〇〇はわかっているけど××は十分にわかっていない」というように自分自身を知って、相手に合わせたりに合わせたりできるような力をもつことが学習を進めていくためには大切なことなのです。⑤のことばかけには、子どもに気づかせるヒントがあります。そこが大切なところでしょう。

幼児期からのことばやコミュニケーションを育てることばかけとして、言語心理学的技法と言われるものがあります。

ミラリンク……子どもの行動をそのまま真似る。

モニタリング……子どもの音声やことばをそのまま真似る。パラレルトーク……子どもの行動や気持ちと言語化する。

セルフ・トーク 自分自身の行動や気持ちを言語化する。

リフレクティング 子どもの発音や文法の間違いを正しく言い直して聴かせる。

エキスパンション ことばの意味や文法を広げて返す。

モデリング 子どもに会話のモデルを示す。

幼児期のことばを育てるとき、私たちは主にミラリングやモニタリングを使ってきました。パラレルトークは子どもたちの行動や気持ちを代弁するものとして使ってきました。ことばの発達にとって大事なことはことばを強要して「言ってごらん」と言っても、子どもの気持ちの後向きにしまわれないこと、子どもの発音を否定したりしないこと等と聞かれたお母さんは多いと思います。子どもが大きくなるにつれて、なぜか私たちは初心を忘れてしまします。そして、子どもたちにとってどうしてなの。言ってごらん。とか「言わないと分からないでしょう」と、話すことを強要しがちです。助詞や文法のまちがい、発音の誤りに気づけば、ま

ちがいなく「違うでよ。○○でしょう。」と言ってしまうのではないだろうか。お母さん自身がお子さんのことばを、やり気なく復唱しているふりをして、正しい発音や文法に言い直して聞かせるリフレクティングやエキスパンションを使ってみると、もう少し子どもたちの気持ちは楽になるのではないかと思います。

私たちの目の前にいる子どもたちは、自分の気持ちをうまく表現できなかったり、ことばを字義通りにとってしまったり、コミュニケーションの下手な子どもたちです。どんなふうに言い表わした方がいいのか、どのように表現を広げていったらいいのかを示していく時にも、その子自身の思いに立って話していくことが、基本にあるれば、子どもたちの心は解放されるに違いないと思います。そして自信をもって話すことができる子になっていくと思います。もう一度、お母さんやお父さん自身のことばを見直してみよう。

十月親の会は、十月九日(火)

午後一時からです。

